

未知なるものへの好奇心を育てよう！

～他国の人と理解し合うために大切なもの～

はじめに

JICA教師海外研修に参加するまでに、「JICA四国教師国内研修教室と世界をつなぐ～SDGsを学校で」に2021年度と2022年度の二回参加していた。そこで「異文化理解」「多文化共生」「国際教育」「開発教育」などを学んだが、やはり私には難しくて今でも、何をどう実践していけばいいのかわからない。でも、一番心に残っていることは、異文化に対して「前向きに（プラスの気持ちで）出会う」ことを大切にしてほしいという講師の方の話だった。

何の予備知識もなく「教師海外研修」のパンフレットを見ても、心を動かされることはなかっただろう。その講座でいろんな人と出会って交流することで、前向きな気持ちで「ナミビアに行こう」と考えた。

少しずつ段階を踏むことで、不安や心配を小さくして、好奇心の向くまま一歩を踏み出す勇気をもつことができれば、人生はより豊かになるはずだ。そんなことを考えながら、生徒の心の中に何かのタネを撒くつもりで、このアクティビティを考えた。

この教材の使い方・参加のルール

この教材は、道徳の教科書にも取り上げられている「むこう岸には」という絵本に基づいている。主人公グラシエラは、両親や周囲の人たちが言う既存の価値観の中で育ちながらも、むこう岸の男の子ニコラスと仲良くなり、将来は橋を架けたいという夢をもつ。かれらに自分を重ね合わせ、既存の価値観を知りつつも新しいものへ向かう好奇心と勇気を育んでもらいたい。

私たちにはそれぞれ、いろいろなものの見方、感じ方がある。それを自分と違うからといって否定するのではなく、違いを認めつつ、ともによりよい関係をつくることの大切さを知ってもらいたい。その上で、お互いに協力したり助け合ったりする道を探ることの大切さを知り、地域や国、世界の一員であることを感じてもらいたい。

全体のねらい

「他国の人と理解し合うために大切なのは、どんな心だろう。」というテーマで、海外の文化や習慣を学ぶことで、異文化理解への興味・関心をもち、異なる文化や価値観をもつ人と交流することを楽しさや喜びを実感する。

今後も更なるグローバル化が進展する中で、世界中の人と協働してよりよい未来を切り拓いていくために、国際的な視野をもち、異なる文化や価値観を尊重して共生するためにはどうしたらいいか考える姿勢を育む。

●概要

本文を読んだ後、もしも自分がグラシエラならどんなことを思うか、感じるか、どう行動するかを考えてみる。そして、どうしてそう思ったか、どうしてそのような行動をしたかなど考えてみる。その意見をお互いに話し合っ、いろんな価値観があることに気づく。

異文化理解、異文化交流を楽しいと思ってもらえるために、まずは不安を取り除いてみることから始める。びっくりすること、楽しいことなどを知ってもらっても、いざ交流するとなると尻込みしてしまうのではないかと考えた。また、自分が困っている立場になったあとに、日本に来てトラブルやハプニングに見舞われている方もいるのだということを知ってもら。その上で自分にできることを考える。

●ねらい

- ・川の両岸に住む肌の色や髪の色、服装が異なる少女と少年の交流の物語を導入にして、他国の人々の生活や文化に興味・関心をもち、互いに尊重する気持ちを育てる。
- ・実際に海外へ行くとき、どんなことに気をつけたらいいのか考えてみることで、海外から来た人に対する見方や接し方について、より身近に思いやる気持ちを育てる。

●主な対象

中学生

●用意するもの

- ・絵本「むこう岸には」 ルタ・カラスコ著・宇野 和美訳、ほるぷ出版、2009年
- ・「もしもあなたがグラシエラだったら、どうする」カード（P91）※予め切り離しておく
- ・「海外で困ったとき、どうする」カード（P92）※予め切り離しておく
- ・教員が体験した異文化でのできごとや写真など
- ・ワークシート：全員分（P93）
- ・ホワイトボードとマーカー：班ごとに1枚、1本

●所要時間

50分

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
1. 導入として「むこう岸には」の絵本を朗読する。	教師が、語りかけるように読み聞かせる。もしくは、朗読の音声があれば、それを使ってもよい。
2. 読後感を隣の人と話す。	特に記述などせずに、思ったことを簡単に述べあう。
3. 学びのテーマを伝える。 「他国の人と理解し合うために大切なのは、どんな心だろう。」	ワークシートの「学びのテーマ」の欄に書くよう促す。

4. 「もしもあなたがブラシエラだったら、どうしていたかな。」を考える。 3人から5人でグループになる。記録者を1人決めておく。	
5. 各グループに、ホワイトボード（B4判程度）1枚、ホワイトボードマーカー1本、「もしもあなたがブラシエラだったら、どうするカード」の中から1枚を配布する。	
6. 各グループで、配布されたカードに書かれた一つの課題について話し合う。「もしあなたがブラシエラだったら、カードの場面になったときどうする？」	教員は、相手の感覚や自分の感覚を大事にしながら話し合っているか、友だちの意見を受け入れた上で自分ならどう思うかを話し合っているか、等に目を向けて机間指導をする。
7. ワークシート「向こう岸には」の「考えてみよう！もしもわたしがブラシエラなら…」の欄に自分の考えや話し合った内容などを書き込む。記録者はホワイトボードに記録する。	グループで意見を集約するのではなく、出た意見や理由を箇条書きにする。
8. グループで出た意見を箇条書きにして、発表する。	話し合って深まった意見も発表する。
9. 文中にある「この川に橋を架けるんだ」という言葉を取り上げる。「もし橋が架かったら、どんなことが起きるかな」と全体に問いかけ、それについてグループで話し合う。	国際交流や貿易などのポジティブな意見、戦争や差別などのネガティブな意見、両方とも同じように取り上げる。
10. 教員や身近な人の海外での体験を話す。	教員が体験した異文化でのできごとや写真などを使って、具体的な事例を提示する。驚きや意外なできごと、困ったことを話す。人から聞いた話や動画などがあるとさらによい。
11. 「もし、自分が海外に行って困ったとき、どうすればいいか」を考える。 グループで「海外で困ったとき、どうするカード」を1枚ずつ選ばせる。	海外旅行で遭遇する場面でも生徒が知らないであろうことを選択肢に入れると良い（メニューに写真がない、パスポート紛失の場合、現地の警察署や大使館へ行く必要があることなど）
12. 配布されたカードの課題について「そのような困ったことがあったときにどうするか」を考え、意見交換する。記録者はホワイトボードに記録する。	電子機器（翻訳機やマップなど）の活用もとりあげる。

13. 話し合った内容についてグループごとに発表し、他のグループの意見をワークシート「向こう岸には」の「行ってみなくちゃわからない。海外で困ったら…？」の欄にそれぞれ記入する。 14. 「橋を渡ってきた人たちに、何ができるだろう」を考える。 グラシエラの立場から、ニコラスのように迎える立場になったとき、どんなことを気遣ったらいいのか、どんな手助けができるのかを考える。記録者はホワイトボードに記録する。 15. 各グループで、意見をまとめて発表する。考えたことやグループで話し合ったこと、発表を聞いて思ったことや参考になったことなどを、ワークシートに書き込む。	観光や留学、仕事で来日した人、近所に住んでいる外国籍の人などを想定すると、考えやすい。もしもない場合、ニコラスの立場で、グラシエラに対してどんなことをしてあげられるか考える。
ふり返し 「この授業を通して、学んだことは何か」「他国の人と理解し合うために大切なものは、どんな心だと考えたか」「自分ができそうなことや今後、心がけていきたいことは何か」など、ワークシートのふりかえりに書き込む。書いたことを、グループで共有する。	授業を通して、友だちの考えや意見に新しい発見があったか。この活動を通して、友だちと協力できたこと、助けられた言葉などが書けるように、声かけをする。

● 解 説

- ・学びのテーマは「他国の人と理解し合うために大切なものは、どんな心だろう。」としているが、その中で特にどんなところに重点をおくかを考えて授業展開を考える。例えば、「異文化への興味・関心」「多国籍交流において互いに尊重し合う心」「互いの文化を尊重し助け合う心」など、生徒の発達に応じて、変えていく。
- ・教員による海外経験については、過去の体験でもよい。また、見たり聞いたりした話でもよい。肝心なことは、生徒に興味・関心をもたせ、好奇心を呼び起こすものであるように心がけたい。

コ ラ ム

海外研修で一番心に残っているのは、ナミブ砂漠でスキップしたことだ。そのスキップは、まったくできていなかった。砂の上でスキップは踏めない、そんな当然のことが私の笑いのツボにすっぽりはまった。お腹が痛くなるのを堪えて、ずっと笑いながらできないスキップを続けた。いい年をした大人が大爆笑でスキップする光景は、自分でも滑稽だと思う。

この「できないことの面白さ」は、学校ではなかなか味わえない。学校は、できないことができるようになることが求められる場所だからだ。令和から改訂された学習指導要領では、かなりの学習内容が前倒しになった。そのために、子どもたちは日々追い立てられるように勉強し、教員も同じように詰めて授業をしていく。いつの間にか「失敗」を回避し、効率の良い勉強方法ばかりを追求している。本当の学びと

はなんだろうかと改めて問い直す機会になった。

二学期が始まり、全校生徒に向けてナミビア共和国で体験したことをたくさん話した。みんなよく聞いてくれていた。そして「旅行してみたい」「海外へ行ってみたい」など前向きな感想も聞くことができた。この小さなきっかけから、失敗をおそれない、おおらかな心をもってくれたら嬉しい。ナミビアで出会った人たちの陽気であたたかい笑顔を思い出しながら、将来どのような人生を送っても、最後には笑顔で乗り越えられる力が、生徒の心の中で育つようにと願う。

村のみんなが「あっちの人たちは、私たちと違っているんだよ。へんな物を食べているし、髪の毛をとかさないし、なまけもので騒々しいって」と言う。あなたがグラシエラならどう思う？	「むこう岸には、絶対行くんじゃないぞ」と父さんが言う。「見てはだめ。私たちとは違うのよ」と母さんが言う。それを聞いて、あなたがグラシエラならどう思う？
ある日むこう岸から男の子が手を振ってきた。私は別の方を見てやったけど、男の子はあきらめなかった。あなたがグラシエラなら…？	朝早く、岸边に行ったら舟があった。むこう岸の男の子が持っている綱は、こっちの舟まで続いている。あなたがグラシエラならどうする？
むこう岸に着くと、男の子が降りるのを手伝ってくれようとした。あなたがグラシエラなら、彼の手をとる？	岸に着いて、男の子がスカーフに入れてくれようとしていました。そのスカーフには独特の匂いがしました。あなたがグラシエラなら、スカーフに入る？
男の子の家族の家に行ったら、みんながいっせいに、大声で話しかけてきた。あなたがグラシエラなら、どうする？	おばさんが、あったかいミルクを出してくれたけれど、いつも飲んでいるミルクと匂いや味が違いました。あなたがグラシエラなら、どうする。
おばあさんは、うちのおばあちゃんとおんなじようにショールを編んでいた。でも、色遣いが変わっている。あなたがグラシエラなら…？	焼きたてのパンの匂い。うちで焼いたパンとおんなじだ！でも、なんか形が変わっている。あなたがグラシエラなら、どうする？

シャワーを浴びようとしたが、どうしたらお湯が出るのかわからない。	レストランやファストフード店で、メニューがわからない。
道に迷ってしまい、どうしても目的に着かない。	財布とパスポートを落としてしまった。
お腹が痛くなって、なかなか治らない。	英語が公用語ではないので、言葉が通じない。
悪天候で、乗るはずの飛行機が飛ばなくなった。	民族衣装を買いたいけれど、サイズがわからない。洗濯の方法が知りたい。
宿泊先のホテルで、予約していた部屋がなかった。	到着した空港で、預けた荷物が出てこない。

「むこう岸には」

学びのテーマ：

考えてみよう! 「もしもわたしがグラシエラなら…」

行ってみなくちゃわからない。海外で困ったら…?

どうしたらいいだろう? ～対策と疑問点～ 他の班の話を聞いてメモをとろう。

橋をわたって来ている人たちに……「ニコラスの立場で、考えてみよう」

ふりかえり

実践事例報告

プログラム作成・実践者

田中 麻生

学 校 名

高松市立木太中学校

担当教科

国語

実践教科

I 総合（国際理解・異文化交流）、II 道徳（中学2年 国際理解・国際貢献）

【授業の概要】

I 総合（国際理解・異文化交流）

マラウィ共和国から来たHAWAさんと交流をした。HAWAさんは、マラウィ共和国「SKY Kids Academy」の園長で、2023年6月日本研修ツアーで来日。日本の教育機関（こども園、幼稚園、小学校、中学校など）、「公益社団法人セカンドハンド」、自然公園や農園を視察。元JICA海外協力隊員の田村さんとのつながりで、学校で国際交流をすることができた。

- ・マラウィ共和国やHAWAさんの紹介
- ・クラスごとに英語で、日本の中学校について紹介（制服や委員会、給食、行事など）
- ・マラウィ共和国の中学校についての質問コーナー
- ・チェワ語バージョン「幸せなら手をたたこう」を踊る

II 道徳（中学2年 国際理解・国際貢献）

(1) 単元名「むこう岸には」（絵本「むこう岸には」）

(2) 単元のテーマ 他国の人と理解し合うために大切なのは、どんな心だろう。

(3) 単元のねらい

川の両岸に住む肌の色や髪の毛、服装が異なる少女と少年の物語を描いた文章を通して、他国の人々や文化を理解するとともに、互いに尊重し合う心を養う。

(4) 概 要

- ・絵本を導入に、登場人物のグラシエラやニコラスの立場になり、自分ならどうするかを考えた。
- ・海外旅行へ行った先で遭遇する困りごとにどのように対処するかを実践的に考えた。
- ・日本にきている人に私たちは何ができるかを考えた。

(5) 指導上の留意点

ポジティブに異文化と出会うことを心がける。クラスでの話し合いを通して他国の人々と理解し合うために、文化や習慣など様々な面から考えられるよう声かけをする。また、登場人物の考えにふれることで、自分自身についてふりかえり、身近なところから、他国の人を理解することについて考えるようにする。

(6) 生徒の感想や学び・気づき

- ・他国の人たちとわかり合うためには、はじめは何も分からず、とても不安になることがあるかもしれないけれど、拒否しようとせず、少しずつ理解していくことでとてもよい関係が築けるのではないかと思います。
- ・相手の文化を受け入れ、助け合えるようなやさしい心をもつようにしたいです。そして、たとえ言葉が話せなくても、アプリなどを使ってなんとか交流できるようにしたいです。
- ・大切なのは、相手を思いやる心や相手の文化を理解する心だと思いました。共通点や違う点を見つけるなどして、受け入れることも大事だと分かりました。これから、積極的に外国について知っていきたいです。
- ・他国の人と理解し合うためには、英語で話しかけたり、ジェスチャーや絵を描いたりすることによって、会話ができたと思った。日本に来る人たちには、様々な文化をもつ人たちがいるから、その人たちの文化も受け入れたいと思った。
- ・私は外国の人とあまり関わったことがないので、日本人の偏見と私が思う偏見は、少し違うように感じた。それでも、やっぱり関わっていくことが一番大事だと思った。
- ・見た目で判断するという偏見をなくす心が大事であり、そこをふまえて助け合うことが大切。もし困っている人がいたら、日本人でも海外から来た人でもすすんで助けられるようにしたい。

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

一貫してポジティブに異文化と出会うことを心がけた。また、生徒自身が貢献できることを考えたり、実践できたりする場面を設けるよう工夫した。ほとんどの講演会では、生徒が受け身で学び、新しい知識を知っていくことが多い。特に大規模校では体験や実践が難しいので、敢えて生徒が来校者に「英語で日本の中学校を紹介する」というような活動を取り入れた。普段の中学校生活が聞く人によっては「学び」や「発見」になることを生徒が知ることで、日常が特別なことである感覚が生まれたようである。

中学生のとしての「アフリカ」は貧しい国というイメージが大きい。しかし、それが一面に過ぎなかったり、想像している貧しさとは次元が違うことを知ったりするのは、大変貴重なことであると考え